



TITLE:

<雑叢>北京留學記

AUTHOR(S):

木田, 知生

---

CITATION:

木田, 知生. <雑叢>北京留學記. 東洋史研究 1980, 39(2): 399-411

ISSUE DATE:

1980-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153777>

RIGHT:

# 北京留學記

木田 知生

北京大學キャンパスの槐樹並木に、再び緑がめぐって来た時、中國滞在が既に一年に近づきつつあることを悟った。昨七九年九月十一日に北京にやってきた時、街路の楊樹や槐樹の並木には、まだ緑が色濃く残っていた。その時から、既に九箇月ばかりの時が経ったのである。その間に起った事どもは、まことに、容易に語り盡すことができない。その様々を思い浮かべると、文天祥ではないまでも、「何處よりか説き起こさん」といった気分になる。

## 一

まず、私のこの中國留學は、昭和五十四年度、つまり、今次を第一回とする中華人民共和國政府獎學金（一箇月、一百四十元を支給される）によるものである。文部省を通じ、留學募集要項が大學に配布されたのが同年の六月下旬、そして、出願書類の提出期限は七月十四日であり、同月二十六日には、東京虎ノ門の國立教育會館で面接試験が實施された。その後、文部省から通知があり、八月初めには、中國留學がほぼ内定した。ところが、肝心の中國政府側からの通知は遅れに遅れ、八月二十九日に至って漸く手元に届いた。そ

の「錄取通知書」には次のように記されていた。

「中華人民共和國教育部已同意木田知生入中國一所高等院校學習中國歷史專業。中略。可持此錄取通知書於今年九月一日至九月三十日期間到北京報到。逾期不到、取消入學資格。」

中華人民共和國  
駐日本國大使館

（原文は簡體字を使用。横書き）

この時点では、どこの大學、もしくは研究機關に配屬されるか、全くわかっていなかったのである。ともかくにも、この「錄取通知書」に添えてあった「中國渡航についての注意事項」（原文日本語）の注記に従い（その注記第四項に、「腰具類は中國側支給に付き、持参する必要はない。」とあったのをおそらく讀んだ）、早速に諸準備を済ませ、二十一日には東京發の日本航空機JAL781便に乗り込み、初めての中國に向けて旅立った。同行したのは、同じく中國政府獎學金留學生として北京に赴く名古屋大學文學部東洋史修士課程の高木智見君である。

快適な飛行を終え、ほぼ快晴の「北京首都機場」に到着したのは、午後二時前であった。そこで、北京語言學院の留學生辦公室、韓宗律老師の出迎えを受けた。この時、自分達が、しばらく北京語言學院に寄宿することを、初めて、はっきりとした形で知ったのである（日本の文部省からも、中國の教育部からも、北京到着後のことについては何ら具體的な通知を得ていなかった）。パスで語言學院に向かう。市街地（北環路）に達するまでの、長く、そして美しい楊樹並木は、北京到着直後の自分に、鮮やかな印象を刻印した。三時過ぎ、學院到着（地址：北京市海澱區學院路十五號 三三一路

公共汽車成府路東口站下车。部屋は、十號樓四階四三三號と決まった。中國の大學は全寮制が建て前であり、この語言學院も例外ではない。私の部屋は、他の外國人留學生と同様に二人部屋で（中國人學生は一室四名）、同室者は、東京の中國語研修學校から派遣された小田幸雄氏であった。こうして、一箇月ばかりの日を暮らすことになった語言學院での生活が始まったのである。

北京語言學院は、一九六一年に成立、原名を「北京外國留學生高等預備學校」と稱したが、六四年に現在の校名に改められた。來華留學生に對する漢語教學と、中國人學生に對する外國語教育（英語・フランス語・日本語・ドイツ語・アラビア語・スペイン語。四年制）、及び短期の外國語研修を主要任務とする。つまり、日本の外國語大學に相當するわけである。機構は、來華留學生一系・來華留學生二系・編輯研究部（語言教學與研究）『中國文學家辭典』等を編輯している）・外語系の四部門から成る（以上の概容は、北京語言學院篇『來華留學生手冊』一九七九年八月版に依據した）。

全ての來華留學生は、まず、この北京語言學院で各自の中國語（漢語）能力を試験され、その試験結果と、本人の希望に従って、或いはそのまま語言學院の來華留學生一系、もしくは二系に残り、或いは、各地の大學へと散っていく決まりである。そのまま語言學院に残る者には二種のタイプがある。漢語能力が、まだ不十分の者、もしくは、一貫して現代漢語の勉強（會話能力の向上も含む）をしようという者の二種である。そして、漢語學習に關しただけ言え、この語言學院は、優れた教育機關である。私の場合、來華五日目六日目に實施された筆記試験・口頭試問（來華した順に逐次實施される）の結果と、二三の先生の推輓とにより、早くから、北京

大學への配屬が決まっていた。翌十月中旬、その預定に従って北京大學に移るまで、この北京語言學院では、全く授業に参加することがなかった。その間、個人的に語學練習をし、學院主催の見學旅行等に参加したほかは、ただひたすら北京を觀て廻っていた。主だった名勝古蹟はその間に觀てしまったのである。従って、學院での授業の様子や、留學生の實態は、自分の熟知する所ではない。しかし、大まかな外廊と重要な諸點だけは、どうしても、ここで書き記して置かねばならないであろう。

まず、自分と同じく、中國政府獎學金留學生（日本の文部省が窓口になっている點で、他の獎學金留學生、及び自費留學生と區別されている）として、九月中に、この語言學院にやって來た者は、全て二十名であった。京都大學からは、自分のほか、考古學の西村俊範氏、中國語學の平田昌司氏の三名である。そのほか、專攻の別から言うと、中文專攻（文學・現代漢語・古代漢語・方言研究等）が九名、中國史專攻が五名、中國美術專攻が三名、中國哲學專攻が一名、中國考古學が一名、政治經濟學專攻が一名、計二十名である。

語言學院には、我々二十名のほか、日中友好協會・日中學院・中國語研修學校等派遣の留學生（大多數が現代漢語專攻である）があり、さらに、外務省及び各種企業派遣の語學研修者等を總計すると、日本人だけで、一時、百名を超えることがあった。ここに學ぶ外國留學生は三百數十名（五十數箇國）であるが、勿論、日本が最大勢力である。そこで、當然、日本人だけが群れをなす、といった海外到る所で見られる宿弊がここでも現出する。大部分の留學生は、早朝七時過ぎに學内の留學生食堂（中國人食堂とは隔てられている。西洋料理が中心であるが、油條・稀飯等の中餐も置かれてい

る)で朝食を済ませ、八時からの午前の授業に精を出す。午後は、原則的に授業は無く、一應、自習時間に當てられている。夜や休日には、學院側が留學生向けに、適當な間隔で各種の催しものを用意し、觀劇・見學に出かけることも多い。留學生の全員と教師の大多數とが學院内に居住しているわけであるから、こうした際の聯絡・統率は、至極簡単に済んでしまう。こうして、自分も、學院で暮した一箇月の間、周口店・八達嶺・十三陵・清東陵(いずれの地も、「外國人未經許可不准超越」とある標識の外側である)等々の地を觀たのである。

十月に入ると、留學生の何分の一かが次第に各地の大學に移つていった。現在、日本人で、文科系學科專攻希望の留學生に開放されている大學は、北から順に、吉林大學・遼寧大學・北京語言學院・北京大學・南開大學・山東大學・南京大學・復旦大學(吉林山東兩大學は、八〇年九月から開放された)の八箇處である。そのほか、美術を學ぶものには、北京の中央美術學院や杭州の浙江美術學院、漢方醫專門學校としては、北京・杭州・廣州等地の中醫學院が、また、杭州の浙江農業學院等も門戸を開いている。日本以外の國家からの留學生には、別の大學も開放されている由である。なお、研究所機關への長期留學は、いまのところ許可されていない。

## 二

北京到着一箇月後、十月二十二日、北京大學に移った。語言學院からはバス停にして四區間、西に隔てただけである。頭上には、その日も抜けるような蒼穹がひろがっていた。その後、一年近く北京で暮し、この十月が、最も美しい季節であることを実感することに

なつた。南門に近い學内の二十六樓に部室を割り當てられたあと(女子留學生は二十五樓)、早速、北京大學留學生辦公室主任柯高老師の説明を受ける。北京大學(以下、北大)の歴史とその重要性(重點院校中の最重要點校である)については、ここで新たに書く要もないであろう。現在の學生數は八、二〇〇名(文革前九、七〇〇名、八五年度までに一四、〇〇〇名に擴充する計畫がある)、研究生(大學院生・研修員に相當)數は四六二名、教職員數二、七〇〇名、教授副教授は四〇〇名近くである。四十近い國家から一三〇名を超える留學生を迎えているほか、八〇年六月からは、短期のサマースクールを開設し、既に、米國からその第一陣がやつて來た。ここでは、米國と日本が、いずれも二十名を超す留學生を送り込んで二大勢力となっている。部室(廣さは京間の六疊程)は、やはり原則的に二人居住であるが、部屋代(月額四十五元)を支拂えば、一人で居住することも認められている。

さて、この北大の日本人留學生は、大多數が本科生(修業年限四年)であり、一年とか二年の短期進修生は、むしろ少數である。老同學に問うて、我々は、日本人の中國留學生としては、日中國交正常化後の第七期目であることを知った。第一期は一九七三年、國交正常化の翌歲である。その第一期生は、大部分が、いわゆる友好人士の子女で、既にほとんどが歸國した。その後、七九年に至るまで、主に日中友好協會を通じて數多くの留學生が北京にやつてきた。しかし、大學院で専門に中國學を修業してきた留學生の訪中は、本格的には七九年度が初めてであったようである。七九年度、文部省を通じて派遣された我々第七期生は、埼玉大學助教關口順氏(中國哲學)を筆頭に、半數以上が大學院出身、もしくは在席者

であったのである。

北京大學は、北京の西北郊外、附近に軍機處胡同・藍旗營等の地名をいまでも残す「海淀」の地に位置する（海淀については、北大地理學系主任侯仁之教授に專論「北京海淀附近の地形、水道與聚落」同氏『歴史地學的理論與實踐』所収がある）。舊來、王府井大街の北側、沙灘に在った舊北京大學（原名京師大學堂）は、一九五二年に至つてこの地に移り、清華大學の文科系部門、及び燕京大學と統合され、翌五三年、新生北京大學の成立をみた。學内のそこかしこには、いまでも「一九五二年三校建委會」とか「燕」と刻したマンホールの鐵蓋が幾つも見出せる。一方、沙灘には北大舊址「紅樓」の一部がいまだに残っている（侯仁之氏に「沙灘的紅樓」という小文がある。『北京街道的故事』——一九六〇年北京出版社—所収）。

さて、海淀の四邊を見渡すと、東北方には理科系の名門、清華大學があり、北側には、一面に圓明園遺蹟が廣がっている。この圓明園は、いまだではその園林の東北偏に在った歐風建築（西洋樓）遺蹟によつてのみ想起されがちであるが、盛時のそれは、長春園（西洋樓はその最北邊に位置する）・萬春園（北大に鄰接・圓明園の三園から成る大園林で、普通、この三園を「圓明園」とか「圓明三園」と總稱した（八〇年一月、北大の畢業生である王威氏執筆の『圓明園』が北京出版社「北京史地叢書」の一冊として再版された）。いま、その宏大な跡地を歩くと、第二次鴉片戰爭時の英佛兩軍、一九〇〇年の八國聯合軍、その後の軍閥時代に受けた度重なる破壊行爲と「洗劫」（王威氏『圓明園』六四頁）の跡は、到る處、眼を覆ひたくなる光景である。文源閣跡も、假山に使われた無數の石が無慘に残るばかりである（文源閣碑は、復原されて北京圖書館内に置か

れている）。ただ、この大園林を取り巻く四邊の山丘の穏やかな曲線と園林内の静かな起伏、そして、人民共和國後の大規模な植林によつて回復された綠樹の美しさからは、おぼろげながら乾隆盛時の優美を窺ひ知ることができる。現在、圓明園管理處が正式に發足し（常設展示があり、圓明園四十景の圖片、『萬園之園——圓明園』等の説明書を用意している）、園林の部分的な再建構想が少しずつ實施に移されている。近い將來、圓明園が、承徳の熱河避暑山莊（七八年より對外開放された）のように盛時を髣髴させる姿を我々の前に現わすこともあるに違いない。

北大から西にしばらく行くと、「中外聞名」の頤和園である。多くの人が、實地にこの大庭園を觀られたであろうから、ここでは贅言を用いないことにしよう。

學内に眼を轉ずると、その中心地域は、舊燕京大學の跡地である。そして、この燕京大學は、清朝時代の庭園（圓明園の屬園）を基礎として建立されたものであった。いまでも、學内の教職員が居住區域には、圓明園附屬園の舊名が留められ、そこかしこに残る湖水や假山の跡からは、當時の結構の大半を想像できる。最近、圓明園址の西洋樓觀水法寶座正面の原位置に設置復原された石屏風五塊は、もと北大「朗潤園」内に放置されていたものと聞く。また、校内の「鳴鶴園」と「鏡春園」は、一時、徐世昌に占據されたこともあったらしい。北大正面を出ると、すぐ西側に「蔚秀園」「承澤園」が続いている。この庭内を仔細に眺めれば、「紅樓夢」の世界を感じ得ることも、或いは、可能である（「大觀園」をモデルにしたという「恭王府」は、現に什刹前海に存在する。雑誌「旅游」八〇年第一期・第三期等参照）。美しい北大のキャンパスの中でも、とり

わけ美しいのは、何と言っても未名湖邊であろう。わけても、五月初旬、湖畔に柳絮が舞う頃のきめ細かな美しさは、自分のいままでに観た最も美しい景観の一つである。ここは、舊「淑春園」の中心をなす部分である。湖水中には、乾隆期の寵臣・和坤が造り残した石舫の礎石がいまも残っている。その南岸の小丘には、エドガー・スノウの墳墓がある。大多數の教官は、これらの舊庭園跡の職員住宅のほか、さらに、學内の「燕南園」（哲學系の馮友蘭教授、中文系の王力教授等が居住）、學外の「燕東園」、中關村（中國科學院の宿舍もある）の宿舍に居住している。いずれも大學に至近の距離である。

大學の機構は、文科と理科に大別され、總計二十二の系、六十二の專業、十一の研究所（亞州研究所・外國哲學研究所・南亞研究所等）から成っている。日本でいう、中國學の「哲史文」（中國では「文史哲」の順になることが多い）は、北大では、哲學系（哲學專業）、歷史學系（中國歷史專業・世界歷史專業・考古學專業）、中國語言文學系（文學專業・漢語專業・古典文獻專業）に相當する（以上は、新入生案内に當たる『北京大學迎新手冊』—北京大學招生辦公室編 一九七九年八月—、及び、入試案内に類似する『北京大學招生專業介紹』一九八〇年、の兩手冊に依據した）。

哲學系は、馮友蘭教授（以下、「教」、張岱年（教）、鄧文民副教授（以下、「副」、湯一介（副）、故湯用彤教授の子息）、朱伯崑講師（以下、「講」、樓宇烈（講）、許抗生（講）といった陣容である。

中文系については、波多野太郎氏に訪中報告「最近中國學界の動向—文學、言語の研究—」（『龍溪』五〇、七九年九月）があるが、ここでは、改めて、教授・副教授と、北大での研究分擔を記して置

く。斯界の大長老たる王力教授（古漢語）は、八十歳の高齢ながら極めてお元気で、最近、『漢語語音史』の編纂に着手されたのとこのとである（人民日報三月八日號）。そのほか、周祖謨（古典文獻）、岑麒祥（語言）、袁家驊（方言）、朱德熙（現代漢語）、陰法魯（古典文獻）、王瑤（現代文學）、楊晦（文藝理論）、吳組細（古代文學）、林庚（古代文學）、季鎮淮（古代文學）の各教授がおられ、副教授陣には、王福堂（方言）、郭錫良（古漢語）、唐作藩（古漢語）、葉蜚聲（普通語言）、徐通鏞（普通語言）、林燾（語言）、裘錫圭（古典文獻）、陸儉明（現代漢語）、甘世福（語言）、石安石（語言理論）、章廷謙（現代文學）、嚴家炎（現代文學）、呂德申（文藝理論）、馮鍾芸（古代文學）、陳貽燦（古代文學）といった教官陣が揃っている。

さて、肝心の歴史系の番であるが、世界歴史專業については省略し、考古學專業についても簡単に觸れるに止める。考古學專業は、大きく、舊石器時代・新石器時代・殷周時代・秦漢時代・唐宋時代の五つの部門に分かれ、各々に、呂遵訓（副）、嚴文明（講）、鄭衡（副）、俞偉超（副）、宿白（教）、高明（副）、李仰松（副）といった教官陣、そのほか、石竄考古には、閻文儒教授がおられる。

中國歴史專業の主任は、宋代史研究の大家・鄧廣銘教授である。教授は歴史系全體の主任でもある。中國史專業には二十名を上回る教官がいるが、以下、大體、年代順に、その布陣を記してみよう。古代史には、張傳璽（副）、陳仲夫（副）、顧德融（講）、孫森（講）、魏晉南北朝史に、周一良（教）、祝總斌（副）、田餘慶（副）、隋唐史には、王永興（教）、吳宗國（講）、唐宋時代の中外交通史には、張廣達（副）、宋代史には、鄧廣銘（教）、李培浩（講）、元明清史に、商鴻達（教）、許大齡（教）、袁良義（講）、近現代史には、陳

慶華(教)、陳芳芝(教)、張寄謙(副)、郭心暉(副)、榮天琳(副)、張注洪(講)、丁則勤(講)、王樹棟(講)、王曉秋(講)、范勛之(講)、張國福(講)の諸先生方がおられる。

北京大學では、中國の他の大學と同様に、入學一年時より専門が分かつた。一學年の學生數は、平均三十名で、一二年時は、日本という教養課程に似て、哲學・古代文選・史料學・外國語等の履習を義務づけられ、中國史についても、主に通史を修學することになっている。八〇年九月の新學期からは、二年時から、「專題課」と「選修課」を履習しても可いことになる由である。「專題課」は、農民戰爭史とか中西交通史等の如く、テーマが廣い時代に互るもの。「選修課」には、斷代史と分期史がある。最後の年次には、畢業論文を要求されている。

授業は、一〇〇分單位。途中、十分間の休憩時間を挟む。午前四部。七時半—九時二十分、九時半—十一時二〇分。午後は、一時半—三時二十分、三時半—五時二十分。夏期には三十分繰り下がる。夜七時半—九時二十分は、主に、語學授業に當てられる。日本の演習・講讀に當たるものは、ない。全てが講義形式である。授業内容は、短期間にしばしば完結もしくは變動するので、その一々を書き記すことは難しい。教授が講義を分擔するのは、むしろ稀で、七九年六月現在、王永興教授が「唐代文書研究」を、商鴻達教授が清朝史を七八年期生以上、及び研究生を對象に講じておられるほかは、副教授、もしくは講師陣によって授業が進められている。現在、授業を擔當されておられない諸教授も、極めて活動的で、學内で、度々元氣な御姿を拜見したし、何人かの先生方には、特別講義の形で接することができた。日頃、指導教官の立場で筆者を教導して下さ

っている鄧廣銘先生は、七九年末、學内の俄文樓で「漫談有關北宋兵制的幾個問題」という題の下に特別講學を行われた。既に嚴寒を迎えていた時期にもかかわらず、午後二時から始まって五時過ぎに終わるまで、休憩を入れず、椅子にも坐せられず、さらに、湯茶をも口にされず、宋代兵制の重要諸點を一氣呵成に論じられた。古稀を幾歲か上廻る御年と伺っているが、その御元氣さは驚歎するはなかつた。今年五月末には、商鴻達先生から清朝史に關する二つの演題(後文参照)で御話を伺い、六月初めには、周一良先生に「關於崔浩」という題で特別講學を受けた。これは、學生達で構成する《求實》學社の請いに、周先生が應じられたものである。

そのほか、さまざまな機會に、學外・國外の著名教授の講演を拜聴することができた。昨十一月末には、北大辦公樓禮堂で、社會科學院世界宗教研究所所長・任繼愈先生(前北大哲學系教授)の「佛教縱橫談」を聴く機會があつた。この講演は、座席を得られなかつた大聴衆が演壇上にも進出し、任先生の背後にまで座を占めるに至つた程の大盛況であつた。今年三月には、米國プリンストン大學劉子健教授が講演され、農民起義の指導者層についての新鮮な分析を提示し、學生間に大きな餘韻を残していた。四月に入ってから、最近、『魏晉南北朝史』上冊を上梓され、『北周六典』を公にされた、山東大學教授王仲堃先生が、制度史について概述され、そのすぐ翌週には、前香港中文大學の牟潤孫教授が「清代史學衰落的(原因)」を論じられた。このように、北大での研究環境は、速い勢いで活潑化してきており、學生や研究生の方も、それに應ずる如く、極めて熱心に學習研究に打ち込んでゐる。隋唐史の王永興先生も、夏期休暇前の最後の課に於いて、特に時間を割いて今後の學習指針

を示され、「平實」の二字を與えて學生を鼓舞された。これら諸先生方の講學の中から自分が學び取ったものは、「通」ということの重み、視野の廣さ、である。

中國歴史專業には、現在、十五名の研究生がおり、各々の研究に従事している。歴史系全體として見ると、七八年度に七名、七九年度には二十一名の研究生が採用された。中國史專業の研究生が迎え入れられたのは、七九年度が文革後としては初めてのことであった。研究生の年齢は三十歳から三十八歳までで、大多數は北大出身。學内に部屋（一室四名）を與えられているが、市内に家庭を持っている人も少なくない。研究分野を時代毎に分けて見ると、先秦一名、隋唐三名、宋二名、元二名、明二名、清二名、近代三名である（秦漢・魏晉南北朝時代を専攻する研究生は、現在、採用されていない）。第二期生（八〇年級）の考試は、本年五月十日から三日間に亘って實施され、平均年齢が幾分下降した模様である（北京日報五月十一日號）。現在、研究生の多くと交際し、或いは教えを受けているが、その學力は相對的に高い。當然のことなのかも知れぬが、中國史及び中國全體に亘る該博な知識を持っているほか、全員が一樣に書籍の「校勘」に對して異様な程の執着心を抱いているのには、實に敬服させられる。その勤勉な學習ぶりには學ぶ所が極めて多く、極く近い將來、彼等の業績を眼にすることになるに相違ない。

中國の大學全般に通じて言えることだが、北大にも、日本の研究室様の部室がない。北大圖書館二階の「敦煌文書工作室」と「中國通史參攷資料編纂室」（中國通史參攷資料 古代部分 第五冊）を編集集中）は、いずれも特別に設けられた部屋であり、そのほか

に、「歴史系中國古代史教研究室」が有るが、これも、その根本性格は事務室である。もともと、研究生同志が一つの宿舍にかたまつて住んでいるので、雑談や情報交換の機会と場所には事缺かない。研究執筆等は、普通、圖書館内の「研究生・教師閱覽室」（一般學生の入室は許されていない）で爲されている。新刊雜誌から、十通・二十四史・四部叢刊等に至る工具書類は、この閱覽室の開架書棚に置かれていて自由に閱覽でき、大部分の叢書も、ここで容易に借覽できる。貴重書類は、圖書館一階の善本閱覽室で見ることができ。それでもさらに見られない善本は、北海公園西鄰の北京圖書館「善本特藏閱覽室」に出向けばよい（一般線裝本は、舊内城東北角・雍和宮南の柏林寺分館に別置されている）。北大圖書館の閱覽時間、早朝七時半から、食事時の休憩を挟んで夜九時半までで、時間的には随分便宜が圖られている。ただ、不便なのは雜誌の閱覽で、とりわけ、國外の學術雜誌は、幾箇處かに分散されていて、目差す巻號を手にするまでには相當な時間を必要とする。

北大の朝は、早い。六時半には、學内の大スピーカーからラジオのニュース報道が流され、また、九時二十分、第一限目が終わった時点で、ラジオ體操の大音響がキャンパス内に響き互る。大半の學生は、この時間までには起きるわけである。もともと、この時間になつても、まだ牀の中、という留學生は少なくない。書店（新華書店）と購買部は、いずれも學内にあり、不自由はない。ただ、一般的でない書籍は入荷されにくいので、研究生や本好きの學生は、度々、西單や王府井の新華書店、琉璃廠の中國書店（古書店）等に出掛けている。

九月から始まつて八月に終わる（七月十日過ぎから夏季休暇）北



大の一年のサイクルの中で、新緑の美しい五月は、氣候もしのぎやすく、その故か、學習研究活動も最も活潑である。この前後には、

「五四運動」(『北京大學學生運動史一九一九—一九四九』—北京大學歷史系「北京大學學生運動史」編寫組 北京出版社 一九七九年)の卷頭卷一章は、「光輝の五四運動」である)を記念する各種の催しが、學内學外各處で引きも切らず開催される。中でも、歴史系にとつて最も重要なそれは、「五四科學討論會」と呼ぶ、學内學會である。本年度は、五月二十六日から六月十七日に亘り、主に、歴史系辦公室・二院一〇八號室を使用して開かれた。發表者と發表内容(容)は左の如くである。

五月二十六日

王曉秋「康有爲《日本變政攷》初探」

同 右「黃遵憲《日本國志》」

陳慶華「關於孫中山的早期活動問題」

五月二十七日

商鴻達「清代皇商介休范家」

同 右「康熙爭取臺灣及其善後措施」

五月二十八日

譚聖安(世界歷史專業)「從中立法到租借法案——論第二次世界大戰初期美國的歐洲政策」

梁志明(世界歷史專業)「略述越南關於古代銅鼓的研究」

五月三十日

商鴻達「論康熙」

徐凱(中國歷史專業助教)「試論明代蒙古三娘子」

李世愉・李廣康(中國歷史專業研究生)「薩爾潑戰役雙方兵力

攷實」

六月二日

張傳璽「論中國古代土地所有權的法律觀念」

吳宗國「開元天寶繁榮原因」

六月三日

潘潤涵(世界歷史專業)「試論歷史發展動力問題」

羅榮渠(世界歷史專業)「歷史發展的偉大動力與終極原因的內在聯系初探」

六月四日

鄭家聲(世界歷史專業)「論殖民土地擴張與南非各民族的歷史命運」

同 右

「論十九世紀以前南非社會經濟結構」

六月六日

祝總斌「八王之亂爆發原因試探」

顧德融「人殉・人性身份探析」

王育成(中國歷史專業助教)「西周侯伯都可稱王說質疑」

六月九日

譚聖安「羅斯福與雅爾塔會議」

鄭亞英(世界歷史專業)「關於羅斯福的評價問題」

六月十日

丁則勤・王樹棟「張太雷生平及其貢獻」

張注洪「鮑羅廷與一九二二—一九二七年的中國革命」

丁則勤「黨的一大召開日期和參加人數的攷證」

六月十一日

考古學專業・山東實習隊「胶東原始文化初步攷察」

六月十三日

山西實習隊「山西翼城・曲沃調查提出的幾箇問題」

六月十六日

青海實習隊「青海大道漢墓の類型及文化性質」

六月十七日

新疆實習隊「新疆中部龜茲石窟の類型」

（多少の變更があつたが、當初の計畫のままを記した）  
學生主催の發表會は、教官のそれより半月程先立つて、五月八日に開催された。研究傾向を知る上で有益な點が有るので、左に、その發表題目を列記する（世界歴史專業は省略）。

「紀念五四運動講演大會」

中國史專業 於文史樓一〇九號室

一、「試論西漢屯田」 中國史專業七八年期生

二、「對朱元璋前期活動的試評價」 考古學專業七七年期生

三、「司馬光奏彈王安石表辨偽」 中史七八

四、「明清交替間大順史論」 哲學專業七八年期生

五、「司馬遷下吏受刑年考」 中史七八

六、「試從兩件敦煌文書論唐土族的變化」 中史七八

七、「石達開與太平天国衰落的關係」 中史七八

考古學專業 於文史樓一一八號室

一、「談談考古學與歷史學的關係問題」 考七七

二、「試論中日兩國舊石器時代文化關係」 考七八

三、「試論中原山東兩地龍山文化前諸原始文化的相互至影響」

考七七

四、「試論河南龍山文化向二里頭文化的過渡期」 考七七

五、「秦始皇十二金人用途及形象的推定」 考七八

六、「試論我國中原地區建築業的起源和初期發展」 考七七

筆者は、右演題の幾つかを聴いたが、中には、手堅い實證と妥當な結論で、實に感心した發表があつた。

### 三

北京大學の中國學に關する概要は、基本的には以上の如くである。ただ、それが、巨大な山容の側面ではないことは言うまでもない。過去から現在に連なる悠久な傳統を継糸とすれば、水平に廣がる教授學生、前輩後輩、多くの畢業生達が織りなす多様な人脈は、その横糸である。中國社會科學院の歴史研究所・近代史研究所や北京圖書館は、斯界の中心的研究機關であるが、その所員は、北大の畢業生である場合が少なくない。筆者も、北大の留學生宿舍に、その兩研究所所員の訪問を受けたが、これは、學内に住む彼等の友人訪問の途次である場合が多かった。互いにしのぎを削つて研鑽し合う環境が整っているわけである。そして、その往來は、相當に頻繁である。

さて、この一、二年の間に、文革中に停止していたか、もしくは新たに構想された幾つかの學會・研究會が、再建、或いは新發足した。まず、文革中に停止していた「中國史學會」が中國史研究の中心機構として、改めて設立された。代表大會は、八〇年四月八日から十二日まで、北京で開催され、全國から一百二十五名の著名研究者が參加した。理事會主席團には、鄭天挺（天津市史學會理事長）・周谷城（上海史學會會長）・白燕舜（北京市史學會會長）・劉大年（近代史研究所所長）・邵廣銘（北京大學歷史系主任）の五氏が選出

された。時を同じくして、全國各省・市・自治區の史學會も正式に成立したのである（人民日報四月十四日號等）。そのほか、「中國圖書館學會」（七十九年七月成立。『圖書館學通訊』七十九年第二期參照）、「中國現代史學會」（陸定一氏が名譽會長、黎澍氏が會長に選出され、常設機構は鄭州大學に設置された。光明日報八〇年六月七日號、及び人民日報六月三十日號）等の會の成立をみた。以上は、學會再興の一端である。こうした學會動向報道の度に氣づくのは、文革前、或いは解放前から名を知られていた老教授達が、いままなお元氣に活躍されていることである。顧頡剛先生は、本年八十八歳になられる由であるが、既に初集が出た『史林雜識』を八集まで出版される計畫をお持ちのようである（文滙報八〇年一月八日號）。謝國楨先生も御元氣で、近年中に『明代社會經濟史料選編』『明代農民起義史料選編』等を刊行される構想で、既に前者の上冊が公開された（文滙報八〇年二月二十七日號參照）。南開大學副校長・歷史系主任・鄭天挺教授（本年、八十一歳）は、「中國史學會」理事會主席團の構成員であるほか、『歷史大辭典』（八十五年までに出版し計畫である）の主編者、『歷史教學』の編集委員を務められ、八〇年夏に南開大學で舉行される「明清史國際討論會」でも主導的役割を果たされるはずである（光明日報八〇年四月十二日號）。『明清史資料』も教授の主編で、まもなく、天津人民出版社から出版される豫定である（人民日報四月二十九日號）。既に物故した著名歴史學者、陳垣・陳寅恪・范文瀾・吳晗・陳守實・呂思勉・賀昌群・馮漢驥各氏に關する文章は、『人物』第一期・『讀書』七十九年七期・『學林漫錄』等々の雑誌や、人民日報（八〇年一月十一日號、蔡美彪：近代史研究所——「范老論學四則」等に登載された。故北京大學

副校長・翦伯贊氏については、その研究生であった張傳璽氏の追悼文が人民日報（八〇年二月二十二日）に掲載され、論文集も既に公開された（『翦伯贊歷史論文選集』人民出版社）。これらの大教授達の著作は、今後さまざまな形で出版重版される見通しである。

今歳に入ってから、日本から悲しい知らせが相繼いで舞い込んだ。塚本善隆先生の死と、それに續く吉川幸次郎先生の訃報である。まことに、巨星墜つの感が深い。吉川先生の死を聞き知ったのは、四月九日午後、先生にゆかり深い琉璃廠中國書店に於いてであった。報を讀したのは留學仲間、西村俊範氏。その日の午前中に、人民日報の報道を見たとのことであった。この琉璃廠には、まだ、吉川倉石兩先生の昭和初年の留學時代を知る人がいる。その王士瑛師傅（若い店員は、年輩者を「師傅」と呼ぶ）は、ニュースを聞いて顔色を曇らせ、「二年前にも、ここに見えたが、……」と、言葉少なであった。現在、琉璃廠の中年以上の師傅達の中には、いまだに來薰閣やら通學齋を記憶している人も少なくない。この書肆街の永い傳統は、必ずしも途絶えていないことを示している。

故吉川先生は、留學時代に足繫ぐ琉璃廠に通われるほか、三箇條の戒を立てて、自らを戒められた、と聞く（『游華記錄』）。そのうちの二箇條は、料理の名を覚えな、芝居をみない、であったと記憶する。實は、自分も、それに似た「戒」を立てて北京にやって來た。ところが、比較的早い段階に、相い前後して、この二「戒」を破棄することになった。郊外の北京大學から市街地に出た場合、往々にして、一般の飯館餐廳で食事を取ることになる。その際に、菜の註文ができなければ、餓え死にしないまでも、わけのわからぬも

のを食べるはめになるばかりである。菜の名字を熟知することは、實に、必要不可欠事であったわけである。「洗練されてはいないかも知れないが、妙にこせこせしていず、まさに、堂々たる本場の味と言わざるを得ない」これは、ある日本の中國料理研究家の言である。首肯できる意見である。この一、二年の間に、文革中に御法度だった老舗の屋號が、陸續と舊に復した。例を挙げると、「萃華樓飯莊」（文革中は「首都飯莊」といつていた。山東菜）、「東來順」（舊「民族飯莊」、清真菜）、「同春園飯莊」（舊「鎮江飯莊」、江蘇菜）、「玉華臺飯莊」（舊「淮揚飯莊」、江蘇菜）、「曲園酒樓」（舊「湘江飯莊」、湖南菜）等々である。北京と言えば、「烤鴨」であるが、幾つかある「北京烤鴨店」のうち最大規模を誇るの、和平門に在るそれである。この店も、舊屋號「全聚德」（前門大街本店）に復することが「批准」され（北京日報二月九日號。ほか、雜誌「旅游」八〇年第一期等を参照）、最近になって、ようやく、その舊屋號を刻した匾額が復活された。さらに、五月末には、舊北京「八大樓」のひとつ「致美樓」が、前門大柵欄糧食店街で營業を再開した（北京晚報六月二十二日號）。菜譜も種々始めた。その代表的なものをも挙げると、中國財政經濟出版社出版の各菜系の『中國菜譜』を初めとし、上海科學技術出版社からは「中國各菜點叢書」（六冊）として、七地域の菜譜が出版される豫定であり、山西人民出版社からは『山西食譜』が、また、北京出版社からも『北京飯店名菜譜』上下冊が出ている。果ては『中國烹飪』という季刊雜誌（商業部中國烹飪編輯部出版）も出廻り、烹飪技術者の育成も眞剣になって考えられ始めた（人民日報八〇年六月二十日號等）。

戲劇の鑑賞は、昨年末、北京劇團一團による京劇「趙氏孤兒」を

嚆矢とし、今に至るまで、戲場に足を運ぶこと、實にしばしばである。觀劇の場所は、前門外の廣和劇場（「旅游」八〇年第一期参照）、あるいは西單の長安戲院、または、東風市場の吉祥戲院、そして、護國寺の人民劇場、隆福寺跡の東城區工人俱樂部であることもあった。大部分が京劇觀劇だが、そのほかに、評劇・曲劇・越劇・川劇・楚劇等も聴いてみた。そのとりどりが興味深く、人々の嗜好や感覺が、あるいは簡單な刑事裁判のしくみや種々の風俗が、一目瞭然であった。とりわけ印象深く思ったのは、戊戌變法を歴史背景に、光緒皇帝とその妃珍妃を主人公にした北京曲劇「珍妃淚」（北京曲藝曲劇團演出）である。自分は、その劇を通じ、清朝人の服裝、及び跪拜の仕方について、初めて、或る程度まで正確に理解できようになったのである。孫觀琴女史の慈禧太后、韓新民氏の榮祿、さらに、佟大方氏の演じた宦官李蓮英も、いきいきとした演技で、見應えがあった。答應の辭である「嚀」の無氣味な發聲は、いまも耳に残っている。佟氏自身が滿族出身で、幼年時に少なからざる清廷大監と接觸し、その後も交際往來があったということなので（『曲藝與曲劇』第三期 曲劇「珍妃淚」專刊 北京曲藝曲劇團編輯）、その演技の迫真も宜なる哉である。それ以後、觀劇は、一種の學習であると心得た。そして、書籍上で知り得なかった多くの事を、舞臺上の演技や細かな動作から學び取ることができたのである。

こうした一連の「學習」で學び得た教訓は幾つか有るが、その主要な點は、風俗習慣から生活様式の微細な點に至るまで、我が日本と中國の間には大きな「差」が存在すること、そして、お互いが、その「差」とその意味を熟知していぬこと、さらに、中國に關する

俗説に誤り多いということ等である。やや表現を改めて言うと、自分も、まだ日本にいる時にははっきりしなかったものが、中國にやってくるに即座に了解できたということがある。食べるもののなかで、包子・饅頭・水餃子・鍋貼・油條・燒餅・烙餅等々の小吃類は、小説やら何かの文章で、實に度々お目に掛かったが、本當のところは、うまく區別ができていなかった。ところが、今では、これらの食べものについては、もう、金輪際忘れっこない、といった程度の自信が持てた。ただ、それ以外の、生活の諸相に及ぶ事柄となると、いまだに理解が及ばぬ點が少なくない。中國史、さらには中國そのものを理解するためには、これらの一切合切について、或る程度以上の知識と理解とが必須なはずである。また、京劇等の主人公達の中で、孫悟空や關羽・諸葛亮等は、とりわけ我々日本人にとってもなじみ深く、つい、日本人の英雄と思ひ込みがちだが、彼等は、やっぱり、中國人が作り出し、育てあげた英雄像であることを思い知らされた。そこから考えつくのは、中國史は、やはり、中國人の作り成して來た歴史である、という單純極まりない事實である。ところが、これらの事柄がうまく理解できていないのに、依然として中國「研究」が進められていくのが現實である。この事實は、今こそ、再び想起されねばならぬ重要事であるに違いない。

最後に、北京市街の現況と、國內旅行について述べる。北京も、御多分に漏れず、新舊の建築が複雑に交錯し、大きな過渡期を迎えている。復興門・建國門の立體交差、宣武門附近の高層住宅群は新しい北京の象徴である。舊中國の古建造物は、その代表的なものについては、『北京旅游手冊』（北京出版社 一九八〇年改訂版）を

初め、北京市文物工作隊編『北京名勝古蹟』（一九八〇年修訂版 北京市文物工作隊は、北京市革命委員會の批准を経て一九七九年八月再建された）等の種々の旅游案内誌で知ることができる。それ以外のものについては、丹念に脚で廻るほかにすべがない。あちこち歩いて見て、これは、と思う古建築・遺蹟があれば近鄰の人々に聞き、それでわからなければ（そして、そういう場合が多い）、『舊都文物略』（一九三五年、北平市政府秘書處編）附載の地圖（胡同名まで記入してある）等で見當をつけ、『北平廟宇通檢』（一九三六年、國立北平研究院史學研究會歷史組編）を繰ってみる。ここには『欽定日下舊聞考』『光緒順天府志』『宸垣識略』『京師坊巷志』を初めとして、北京について誌した代表著作十六種が網羅されているから、調査對象の大部分について、その名稱・沿革等を知ることができる。もっとも、この『通檢』に收録されていない書籍もかなりあり、それら『長安客話』『宛署雜記』『故都變遷記略』『北京史蹟叢書』『北平史表長編』『京津風土叢書』等々は、隨時見て置く必要がある。また、以上とは反對の手續を経て、北京の史蹟探訪に赴くこともできるわけである。一部未公開史蹟以外は、この様にして、その大部分を參觀することができた。しかし、書籍上で知り得た史蹟が、既に存在しなくなっている例は、残念ながら、相當數ある。一方、解放後、人民共和國政府の保護修復を得て、盛時に近い輝きを取り戻したのも、また、少なくない。故宮・天壇・頤和園・北海等々はその一例。近い將來には、雍和宮・國子監・西黃寺・白雲觀等々が修復工事を終え、對外的に開放される由である（北京日報六月一日・二十日號、及びその他）。

中國國內の旅行は、留學生や語學專家にとって、その旅行期間が

所屬學校の休暇中でさえあれば（休暇以外でも、特例が有る）、「旅行證」申請も簡単に認可され、對外的に開放されている都市・地域

（その一覽表は『北京旅游手冊』三二四頁に記載されている。その後、主だった地域としては、福建省の福州・廈門・漳州・泉州の四都市が新たに開放された）を自由に旅行できる。一人旅でも、勿論、問題はない。各地域には、外國人が宿泊するための賓館・飯館・招待所の類があり、建て前として、その種の宿泊施設を使用しなければならぬ決まりである。「硬臥」や「硬座」に坐して行く火車の旅は、中國の人々と接する機會が多く、中國語のうまさに應じて會話を楽しむことが可能である。興味を抱いた地域を、納得のゆ

くまで、あるいは度重ねて訪問することができるのは、やはり團體旅行にない特典であろう。

ここまで書いて來ても、まだまだ書き盡くせなかつた事柄が山ほど残った。それらは文章に表現しにくかったり、また、この誌面に相應しくない内容であつたり、様々である。しかし、その多くは、やがて、この中國にやつて來て、幾らかでも長期間に亘つて滞在することになる人々にとって、自明のことのように理解できる事柄である。

（在北京大學）